

校長室便り

(文責)

ドーハ
日本人学校校長
酢谷昌義

合奏「コンドルは飛んでいく」

学習発表会(その3)

前回に引き続き、来賓の皆様からいただいた感想を紹介いたします。

⑤去年に引き続きすばらしい子供達の発表会を拝見させて頂きまして誠にありがとうございました。子供達もさることながら、先生方の日々のご苦勞もさぞかし大変なことかと思えます。小職は家族を日本に残してきていることから、なおさらに子供達が一生懸命取り組んでいる姿を見ると、自分の子供達の小さいころの様子と重なったり、同じように日本の学校でいろいろ活動しているものの、自分としてはその様子を見てやることができないう気持ちで思わず目頭が熱くなってきてしまうのは、すっかり歳のせいなのかもしれません。

自分の子供の様子は見れない代わりに、他のお子さん達の様子を拝見して、心が新たに洗われる気持ちになれただけでも幸いです。

⑥出来れば最後まで見学させ



みんな自分の役割を果たしました

て頂きたかったのですが、残念ながら途中退席する事となり失礼を致しました。少ない見学時間の中でも、生徒の皆さんが精一杯に成果を発表する姿はこちらにも伝わって参りました。

生徒数30人を超えるほどの規模となり、今後、益々ドーハ日本人学校が発展していくことをお祈りしております。

⑦学習発表会では、児童・生徒の素晴らしい学習の成果を見ることができ、素直に感動しました。

昨年よりも、一段とレベルアップした内容の数々と、児童・生徒の成長ぶりには驚きとともに感心しきりです。また、司会進行や、プログラム毎の小道具、机椅子の出し入れを児童・生徒が協力してスムーズに行なっていること、

さらには、上級生が下級生に的確に指示を出したり、「座って」「静かに」と注意・指導するなど、学校全体がひとつにまとまっている、自分の立場や周りの状況が見えている、そのような児童生徒が育っていることが実感できました。

これも、ひとえに先生・講師の皆様への教育に対する情熱の結晶であると感じ入りました。ありがとうございます。

今後のドーハ日本人学校の行事も楽しみにしています。

子ども達の活躍が保護者の皆様はもちろん、日本人会の方々にも楽しんでいただける、そんな学校にできたら素晴らしいと思います。そのための努力を続けることで、きっと子ども達の「確かな力」を育てることになると信じています。



全校児童・生徒で元気良く歌った「どんときも」

校長室便り

(文責)

ドーハ
日本人学校校長
酢谷昌義

自分に負けない自分にするために

「自分に負けない」という気持ちで走り続けることができれば、自分にとってプラスになる大きな力を身につけることができるのではないかと思います。

「机・イス」と「図書」 が送られてきました

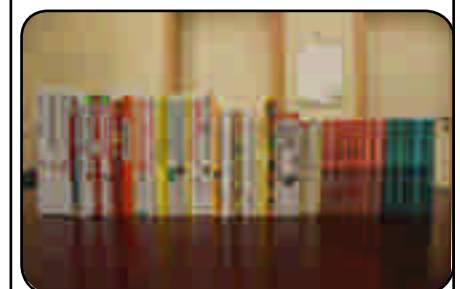
海外子女教育振興財団の教材整備事業により、児童生徒用の机・イスが17セットと、大型の定規セットが届きました。どちらも不足していたものなので大変助かります。

また、理想教育財団の海外支援事業として、子ども達のために45冊の図書があわせて送られてきました。

どちらも学校として本当に有り難い贈り物です。大切に、そして有効に使わせていただきたいと思っています。



届いた「机・イス」と「図書」



持久力を鍛えよう!

先週から中間休みを利用して、校舎の周りをみんなで走っています。やっと戸外で活動できる季節になりましたが、それでも走り終わると汗が噴き出してくるほどです。

体育の時間に取り組んでいる「水泳」は、全身運動で心肺機能を高める上でも大変効果的なものです。しかし、陸上の運動とは大きな違いがあります。長い距離を泳ぎ続ける力がつければ、同じように走り続けることができるかということそうではないのです。

絶対的な運動量が不足してしまうこの国の生活で、子ども達の健康・体力を考えたときに、最も気にかかるのが持久力です。なぜなら、持久力はある程度の負荷をかけた運動を、継続して行わなければ身につけることができないからです。調整力や敏捷性といった力は、いろいろな方法で補うことができます。先日の学習発表会で1・2年生が披露したように、縄跳びやマット・鉄棒等に親しむことで、基礎

的な力はそれぞれ身につけてきているように思いました。

持久力を鍛えることができる期間は、この国ではこれからの本当にわずかな期間しかありません。だからこそ、わずかな時間であっても大切にしたいものだと思います。

子ども達は2時間目が終わると同時に、外へ飛び出していきます。そして一生懸命走っています。まだ始めたばかりですが、こうして外を走ることができる限り、しっかり取り組んでほしいと思います。

特に高学年や中学部の生徒には頑張してほしいと思います。日本の学校であれば、対外的な競技会参加のための練習が行われたり、毎日部活動でへとへとになるまで練習をしたりするなど日常的に繰り返されています。それをしていくとできない国で生活しているということを自覚し、自身の体力的・精神的持久力を高めていくために、本気で取り組んでほしいと思います。

人との競争ではなく「自分



みんなが「1周でも多く走ろう!」と頑張っています

校長室便り

(文責)

ドーハ
日本人学校校長
酢谷昌義

徐々に充実していく図書室

「うちどく(家読)」って何?

読書についてたびたび触れていますが、「うちどく」という言葉があり、最近大きく広まっているということを私は初めて知りました。たまたま読んでいた冊子の中で見つけた言葉ですが、日本は今年「国民読書年」だったということともあわせ、ずいぶん国内の情報に疎くなっているということを改めて感じました。「うちどく」は「家読」と書きます。読書推進のための様々な活動が行われる中、大きな注目を集めているものだそうです。

授業が始まる前の時間を利用して、学校で好きな本に向かうというのが「朝読書」、いわゆる「あさどく」です。それに対して家で読む読書を「うちどく(家読)」と言って、積極的に取り組む家庭が増えているということです。

特別なやり方があるわけではないようですが、家族で同じ本を読んだり、読んだ本のことを話題にしたりするなど、いろいろと工夫を凝らして取

り組まれているようです。

インターネットで「うちどく」を検索すると、様々な情報がすぐに見つかります。お勧めの本が紹介されていたり、ダウンロードして利用できる「うちどくノート」があったりします。

こうした情報の中で、「ノーテレビ・ノーゲームの日を設けて家読をしよう。」という部分がありました。私がこの国に来るまでは、勤めていた学校でも子どもを通わせていた学校でも、この「ノーテレビ・ノーゲーム」の取り組みをしていました。この国ではほとんどテレビを見ていないので、すっかり忘れていましたが、戸外での遊びが自由のできない国なので、ゲームやパソコンなどのメディア漬けになっていることは考えられるのではないかと思います。

全国学力テストの結果から、分析的読解にテレビやゲームが悪影響を与えるということが分かっています。そういう時間を少しでも読書に向ける

ことができれば、こんな素晴らしいことはないと思います。「うちどく」によって家族のコミュニケーションが深まったという実践例が、いくつも報告されています。家で本を読むということは、考えてみれば特別なことではありません。しかし、そこにちょっとしたアイデアを取り入れたり、工夫を凝らしたりすることによって、ずいぶん意味のあるものにしていけるのではないかと思います。

皆さんも「うちどく(家読)」を始めてみませんか。

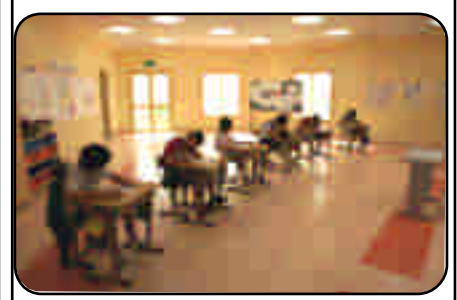
「2学期 期末テスト」 中学部頑張れ!

今日から中学部は期末テストです。中間テストに比べ教科数は多いですが、十分な準備をして、全力で取り組んでほしいと思います。

結果の善し悪しはもちろん気になるでしょうが、自分の力を確かにするために、テストの後にも復習をしっかりとやっていくことが大切だと思います。



学校での「朝読書」はすっかり定着しています



一斉に取り組む「保健体育」

校長室便り

(文責)

ドーハ
日本人学校

校長
酢谷昌義



走ることは全ての運動の基礎

なり、子ども達にとって大変望ましい形になってきているように思います。

投運動は、自分で自分の伸びを把握することが容易です。遠くに投げられるようになった、速く投げられるようになった、ねらったところに投げられるようになったと、少しでも自分の力を高めたいと思います。

ソフトボール投げの記録

小学部低学年〔1・2年生〕	
4. 00m	9. 45m
11. 60m	8. 00m
4. 85m	9. 55m
6. 00m	5. 65m
5. 88m	5. 80m
8. 60m	7. 00m
	7. 75m
中学年〔3・4年生〕	
15. 80m	13. 25m
7. 00m	21. 60m
5. 30m	15. 20m
	9. 75m
高学年〔5・6年生〕	
19. 95m	13. 30m
29. 87m	28. 55m
中学部（ドッジボール投げ）	
20. 25m	15. 00m
21. 20m	18. 05m
20. 55m	17. 70m

※中学部は「ハンドボール投げ」が正式な種目です。今回は参考記録とし、次回からはハンドボール投げをしたいと思います。

体力・運動能力について

先週木曜日の体育は、アスパイヤで50m走とボール投げの測定を行いました。日本では通常第1学期のうちに行う体力テストの種目になっていますが、カタールではこの時期でなければできないので、ようやく測定できたという思いでした。

私が気にしているのはボール投げです。

昭和60年と平成20年の調査で、小学校高学年のソフトボール投げ全国平均の記録を見ると、

○昭和60年→平成20年
・(小男子) 29.94m→25.40m
・(小女子) 17.60m→14.60m
以上の結果が出ています。

男子で4.54m、女子で2.74mも平均値が落ちています。反復横跳び以外の種目では、男女とも50%以上の児童が昭和60年度の平均値を下回っているのです。なかでもこのソフトボール投げは記録の落ち込み方が大きく、男子の69%・女子の72%が平均値を下回っているのです。

こうなった原因はいろいろ考えられるでしょうが、日常の子ども達の生活の変化、特に遊びの変化が大きいのではないかと私は考えています。遊びを通して、様々な運動経験を積み、その結果が体力テストの数値に表れていたのではないかと思うのです。

ボールを投げる運動は、手を振るといふ動きだけが問題なのではありません。ボールを遠くにとばすには手と足がうまく連携した動作が必要であり、全身の調整力が求められます。そのため、他の種目に比べて記録の落ち込みも大きいのだと思います。

幸いにも、ドーハ日本人学校では「ドッジボール・サッカー」が盛んに行われるようになってきました。今みんなが最も熱中している遊びかもしれないときには、どちらも全く行われていませんでした。遊びも多様化し、いろいろな遊びに取り組むことで、違った種類の運動経験を積むことに



調整力を高める器械運動



みんなでボールを追いかけます